

インドネシア・ジャワ島自然地域の アウトバウンド観光デスティネーションとしての可能性

田中伸彦 [東海大学観光学部] ・ 杉村乾 [(独)森林総合研究所/CIFOR]

キーワード：自然地域 アウトバウンド観光 生態系サービス インドネシア

1. 研究の背景・目的

エコツーリズムと生態系サービス (Ecosystem Services) に関するアジア諸国の現況を調査するため、インドネシア共和国のジャワ島を対象にフィールドワークを行った。

アジア諸国の中で、現在インドネシアは中華人民共和国に次ぐ水準で経済発展している注目される国である(佐藤 2011)。また、近代史の中で、インドネシアは日本との関係の深い国でもある(倉沢 2011)。そのため、日本とインドネシアの相互間観光の現況や可能性を調査することには一定の意義があると考えられるのであるが、日本からインドネシアへの自然地域へのアウトバウンド観光の調査事例となると、今のところほとんどみられない。筆者らにおいても、アジアにおけるエコツーリズムと生態系サービス (Ecosystem Services) に関する調査のため、これまでに中華人民共和国福建省を対象としたエコツーリズムに関する調査(田中ら 2012)などを推進してきたが、今回初めてインドネシアへのフィールドワークを行った。先例のほとんどない新規調査であるため荒削りな内容とはなるが、その調査の中で得たいくつかの知見を本報告で発表する。

2. 対象・方法

(1) 対象地

対象地はインドネシア・ジャワ島、ジョグジャカルタ近郊にあるメラピ国立公園(*注1)およびパリアン野生生物保護区、そしてジャカルタ・ボゴール近郊のグヌングテパンランゴ国立公園とした。これらの対象地は、観光や交流の対象地として、少数の日本人が来訪することのあるデスティネーションではあるものの、日本からの大規模な商業ツアーなどが組まれるデスティネーションではないという共通点がある。

(2) 方法

方法としては、現地を訪問して当該地の管理者に対する聞き取り調査を行った。メラピ国立公園においては、国立公園管理事務所の所長をはじめとするレンジャーに(2012年3月8日)、パリアン野生生物保護区においては同保護区の管理官に(2012年3月9日)、グヌングテパンランゴ国立公園においては同国立公園ビジターセンターに勤務する日本人の海外青年協力隊(JICA)の派遣職員から(2012年3月10日)話をうかがった。聞き取りの方法としては、各対象地ともまずはカウンターパートにパワーポイントなどで、現地の知性や環境、観光地としての利用状況、日本との関わりなどについての概要を説明してもらった後に、質疑応答をとるという形で進めた。また、これらの聞き取り調査を行った後に引き続き現地の



図1 位置図 (M: メラピ、P: パリアン
G: グヌングテパンランゴ)

巡検を行った。

3. 結果及び考察

(1) メラピ国立公園

メラピ国立公園では、2010年に発生した火山の噴火からの復興が国立公園の利用面における大きな課題となっていた。現在噴火は沈静化し、自然地観光の各施設も復興に向かっているが、場所によっては、いまだ噴火災害の破損などが残された状況にあった(写真1)。日本からのアウトバウンド観光は、観光資源としての価値があるため登山等を目的として少数ある状況だが、宿泊・交通・情報インフラの充実が今後の受け入れ増加の要となると考えられていた。



写真1 メラピ山麓の観光拠点



写真2 パリアン野生生物

保護区の記念植樹林

(2) パリアン野生生物保護区

パリアン野生生物保護区では、日本の三井住友グループとの協働で、鳥類や昆虫などの野生生物の調査・保護活動を推進している。その活動に関連する形で、記念植樹などを通じた2国間の交流も行われていた(写真2)。このような、交流型の自然地域観光の発展の可能性もインドネシアへのアウトバウンド観光として、念頭に置けることが明らかとなった。

(3) グヌングテパンランゴ国立公園

グヌングテパンランゴ国立公園においては、日本からの海外青年協力隊員が常駐で勤務していることもあり、ビジターセンターに和文のリーフレットなどが用意されていた。場合によっては隊員がトレイルガイド等の業務も行う体制が整っていた(写真3)。その様な点で、この国立公園は自然地域のアウトバウンド観光デスティネーションとして条件は整っている。ただし現在は、日本人来訪者はジャカルタ・ボゴールなどの在留邦人が主体であるとのことであった。

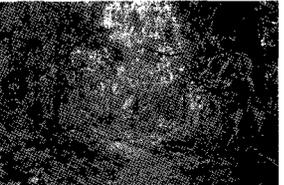


写真3 グヌングテパンランゴ

国立公園のトレイル

4. まとめ

以上、インドネシアの自然地域における日本からのアウトバウンド観光の可能性を考察した。現時点では情報が少ないため、新規事例の紹介の水準にとどまっているが、このような情報を積み重ねてエコツーリズムと生態系サービス(Ecosystem Services)に関するアジア諸国の現況をとりまとめていきたいと考えている。

なお本研究の一部は、環境省の地球環境研究総合推進費(H-081)の支援により実施された。

【参考文献】

- 1) 田中伸彦・宮本麻子・松浦俊也・杉村乾(2012)森林人家基本条件、森林人家計画技術規程及び森林家のランク区分および評定 —中国福建省のエコツーリズム宿泊施設等に関する基準—, 東海大学紀要観光学部 2:47-96
- 2) 佐藤百合(2011)『経済大国インドネシア - 21世紀の成長条件』, 中央公論新社, 262pp
- 3) 倉沢愛子(2011)『戦後日本=インドネシア関係史』, 草思社, 445pp

【注】

- 1) 日本語においては「メラピ国立公園」と紹介される場合も多い。